

「宮澤賢治のふるさとを訪ねて」

文学部教授
渡部芳紀先生 ご紹介



一年間に何万キロも車で旅をする渡部先生は、既に20台の自動車を持ち継いでいるそうで、自動車会社のセールスマンにとっては、超お得意様である。

それほど文学の足跡を求めて旅をしていることになる。今回の番組のロケにも四国からとんぼ返りで岩手までやってきたとのことであった。先生のメールアドレスは、houki@tamajs...ということで、お名前の「芳紀」を音で読んで「houki」となっているそうである。賢治同様、星の好きな先生は、このhoukiをホウキと呼んで「彗星」をイメージしているとも言っている。何とロマンチストなのであ

ろうか。この夢のような話を心に沢山貯えているからこそ、賢治を心から愛し、賢治が導いてくれる自然に感謝しながら旅が続けられるのではないかと羨ましくさえ思えるのである。今回のロケ旅の途中にも、「こんなに素晴らしい自然に巡り合えたのは、賢治のおかげです。」という言葉は何回も聞いた。渡部先生の人となりを最も明確に表わしている言葉である。

(渡辺記)



岩手山

文学散歩はあくまで散歩が中心である。文学をより深く理解するために散歩するのではない。その文学が好きだから、その文学者に心魅かれるから、文学の舞台やヒントになった舞台に立ちたい、作者の生まれ育ったところ、行ったところを尋ねてみたいと思うのである。それはあくまでも、旅が中心であり、旅の仕方である。文学が文学者によって、旅がひと味違った豊かなものになれば、それでよいのである。

賢治文学散歩をしていて、自分が幸せだなあと感じたことが三度ほどある。

何年前か、六月頃であってであろうか。小岩井農場の北端、くらかけ山のふもとの松の林の中を歩いていた。ところどころにはまだ残雪があった。小鳥の澄んだ声はまだひやかなあたりの空気をぬって聞こえて来た。こんな美しいところを歩けるなんて賢治のおかげだなと思ったことである。その秋も、大空の滝を見るため山道を歩き、紅葉した「ぶな」の林に陽がさし込んで来た時、また、長年の念願がかなってくらかけ山に登山したあと、紅葉の雑木林を歌をうたいながら走るように下って来た時、賢治を「する」幸せを感じた。

賢治を好きな、賢治作品を好む人に、こうした気持ちを少しでも味わっていただければと思うことである。

(『宮澤賢治名作の旅』渡部芳紀著 より)

今回の番組では、賢治の3つの作品にスポットを当て紹介しながら旅をしています。そこで、簡単なあらすじをご紹介します。

1. かしはばやしの夜

この作品では、清作という木こりが、かしはの木を切る時に、かしはの木に挨拶が無いことで、かしはの木と緊張状態となります。自然(かしはの木)と人間(清作)とのぶつかり合いがテーマとなっています。ただ、ここでのヒントは、もし清作が、かしはの木にお酒を飲ませれば、かしはの木は清作を許すと言っているところです。



狼森辺り

2. 狼森、策森、盗人森

この作品では、自然と人間が共存することをテーマとしています。しかしながら、人間が、ほんの少しでも森(自然)への感謝の気持ちを忘れると、森(自然)の悪戯に合ってしまいます。ここで登場する狼や山男などは、あくまで自然の代表と言えるのでしょうか。

3. なめとこ山のくま

この作品では、生きるために戦う「熊と人間」が、心の底では互いに信頼しきっている様子に感動します。一方で、熊の毛皮と胆を売りに街に出る小十郎と商人の人間同士の関係が、何となく醜く見えてしまうのは、なぜでしょうか。そしてこの作品こそ、自然と人間とが互いを認め、共存していく様子を描いた作品といえるでしょう。



なめとこ山を望む

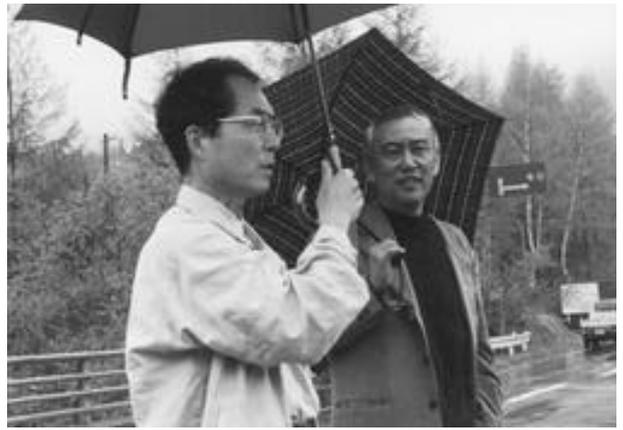
<取材レポート>

目の前に、本当にのどかな田園風景がひろがっていた。その向こうには、北上川の流れるがほんの少し見隠れする。「あの橋のところには川面が見えるでしょう。あそこは昔、渡し船が通っていた場所で、右側の森の方から左の川岸へ、その船に乗って『座敷わらし』が移っていく物語が描かれているんです。賢治は、遠野の座敷わらしの物語とちがって、ここ(花巻)にも座敷わらしの物語があることを書いているんです。」「それから、さっきの右側の森なんですが、あの森の辺りも『二十六夜』の舞台になった獅子鼻というところです。」渡部先生の話の聞いていると、ほんの小さなのどかな風景が、浮き出るように光り輝いてくるから不思議である。「この碑は、高村光太郎が賢治を偲んで建てたもので、雨にもまけず・・・の詩の後半が彫られているものです。ただ、碑をよく見ると、彫らせたあとで間違いに気付き、右側に文字を追加してもらっているんです。高村光太郎の人となりに触れる一瞬でした。こんな逸話を聞きながらの旅は、なんとも楽しい旅でした。



羅須地人協会

実は、この番組の取材中に太陽が顔を出したのは、唯一この時だけだったので。ただ、晴れ間が無かったわけではありません。宿泊先の休暇村で、夜くつろいでいた時、私と先生が、月の明かりを見つけました。もちろん『なめとこ山のくま』に出てくる1シーンを想像し、夜中の撮影となったことは言うまでもありませんでした。できることなら、みなさんに、素晴らしい岩手山を紹介している私と先生の様子をお見せしたいと思っていたのですが、とうとう曇りと雨ばかりの風景になって



渡部先生（左）と渡辺

しまいました。ところが、先生はこの雨さえ楽しんでおられるようで「雨も自然の一部ですから・・・」と自然に溶け込んでしまっていました。おかげで我々は、ビショビショになりながらも落ち込むことなく楽しく幻想的な風景を堪能しながら取材を終えることができました。そして、私自身も賢治の心の風景を「木版画」という形で表現できたことに、大変な喜びを抱くことができた旅でした。

もし、この秋に実施される予定のツアー「宮沢賢治のふるさとを訪ねて」に参加していただけたら、日本一の賢治の案内人が同行してくれると考えていただいても良いと思います。それほど賢治の心情をこと細かに語ってくれる先生はいないと思うからです。

（広報課 渡辺記）

